

## 第2章 北薩地方



京田遺跡（川内市）

## 第1節 先史・古代の北薩地方

北薩は東シナ海の甌列島、不知火海に浮かび天草諸島へと繋がる長島の島々、県境の矢筈岳の裾野の出水平野から黒ノ瀬戸海峡を経て、川内川河口に続く海岸線、さらに中央部を分断する紫尾山系から川内川上流域で構成される。このように変化に富む地勢は豊かな環境を提供し、また古くから肥後との境界を接することから、人々の足跡が数多く刻まれてきた。

上場高原は、旧石器時代の一大核地帯として、素材となる石材や製作技術を県内各地に供給することとなる。一方、島原半島から長島・川内市を経て、南薩・指宿市に至る海岸線の交流ルートも知られる。

縄文時代の貝塚は、海が豊かな生産地であったことを伝えている。出水貝塚・荘貝塚・江内貝塚・波留貝塚・麦之浦貝塚・手打貝塚、県内の数少ない貴重な貝塚が残されたのもこの地域の海岸線である。また、縄文時代中期から後期に有明海沿岸を中心に展開した阿高式・南福寺式土器、鐘崎式土器文化は、出水平野を巻き込み、川内市から金峰町に達している。また、この頃までは見晴らしの良い台地の先端部、海岸や湿地帯に突き出した丘に多くの遺跡が造られていたが、縄文時代も晩期になると現在の水田や河川の自然堤防を生活の拠点とするようになってくる。この生活拠点の変化は、次の弥生時代以降も引き継がれ現在に至ることとなる。

出水市と川内市の市街地を走り抜ける九州新幹線鹿児島ルートは、それまで希薄とされていた弥生時代以後の様相を鮮明にしはじめている。川内川の自然堤防に形成した大島遺跡と、国分寺台地下の京田遺跡を重ねると、弥生時代のほぼ全ての土器変遷が観察できる。大島遺跡は薩摩半島西海岸地域で普遍的な刻目突帯文土器からスタートし、前期の後半から中期の初め頃までは在地系の入来Ⅰ式やⅡ式土器が主流を占める。しかし、中期の中頃から中期後半の間は、大島遺跡での人々の生活痕跡は突如として消え、全くの空白期が出現する。そして、その空白期間を補うように京田遺跡が出現する。ところが、京田遺跡から出土する土器は、黒髪式土器と呼ばれる肥後系の土器である。この時期、薩摩半島南部や大隅半島は、在地土器である山ノ口式土器の全盛期

であるが、全く発見されない。後期に入ると、人々は一斉に大島遺跡に移動し、今度は京田遺跡から弥生人の生活痕跡がかき消されていく。大島遺跡への移動当初は、肥後系土器を引き続き使用しているが、終末期には、在地の土器である中津野式土器へと移行しており、肥後地域との連携が遮断されている。二つの遺跡の土器の変遷や遺跡の動きの背景には、変動激しい当時の北薩弥生人の動勢が隠されているようである。

京田遺跡からは川跡とドングリの水晒し土坑や水田跡が、百次町の楠元遺跡では集落跡と水田跡が発見され、新たな生活風景を表現しつつある。

阿久根市の鳥越1号墳は南限の初期畿内型古墳であることが判明し、4世紀には中央の統治体制が確実に及んでいたことを明らかにした。その後、北薩地方は複数の墓制を展開する独自の様相を示すこととなる。出水平野と川内川中流域には地下式板石積石室墓、下流域には高塚古墳・地下式板石積石室墓・土壙墓等が造られる。一方、長島では横穴式石室墓の流れを汲む特徴的な積み石塚古墳が展開している。残念ながら、この時代の生活遺跡は多く知られていないのが実状である。東町山門野遺跡は、集落を鳥瞰できる可能性を秘めていたが、調査が全域に及ぶことはなかった。高城川の護岸の外川江遺跡からは、大量の土器と石庖丁等が発見されたが、生活を具体的に復元するには至らなかった。

701年の大宝律令制定の翌年、川内市御陵下町から国分寺町の台地に薩摩国府が置かれ、奈良時代末には、国府に隣接して薩摩国分寺が建立される。これにより、薩摩国の政治・文化の中心地となり、次第に律令体制下に汲み込まれていく過程を如実にみることができる。京田遺跡では告知札とされる木簡の発見から、地方行政や土地支配の様子が解読され、大島遺跡では奈良時代から平安時代に30軒以上の住居跡が重なり合って発見されている。薩摩国分寺の建立と、それを取り巻く時期の新たな発見は、以後、この地域が政治・行政の中心地であったことを示している。

掘立柱建物跡、作業小屋とされる竪穴建物跡が発見された上野城跡の調査では、鎌倉時代以降の様相が徐々に明らかにされつつある。また、出水市の大

坪遺跡でも多数の溝状遺構と掘立柱建物跡が、中世以後の条里型地割の下層から発見されている。

## 1 旧石器時代

昭和40年、川内市の馬立遺跡で採集された木葉形石槍が、本県初の旧石器時代の遺物として考古学専門書に登場している。石槍は、長さ9,5cm×幅3,75cm×厚さ0,95cmの頁岩製で、現在では鹿児島県歴史資料センター黎明館に展示されている。

その同じ昭和40年、池水寛治が上場遺跡を発見することとなる。翌年から開始した上場遺跡発掘調査は、本県旧石器時代はもとより我が国旧石器時代研究の先駆けとなる。

上場遺跡を核に半径4km圏に40か所を越す遺跡が確認され、昭和40年代、発見者の池水と出水高校考古学部の5回にわたる発掘調査は、多くの学術的成果を挙げると共に上場遺跡を世に広めることとなった。

数ある成果の中でも、入戸火砕流の二次堆積層下位の二つの文化層と、重複する6期の文化層の発見は旧石器時代の標識遺跡として現在でも活用されている。発掘した2軒の竪穴住居跡は、我が国初の旧石器時代住居跡の発見と評価され、学史に記憶される。ちなみに1号住居跡は、浅く碗状に掘り込まれ、その外周に内向きに掘られた多数の小さな穴は屋根を支えた柱跡と判断し、ドーム状の住居が造られたと考えられている。重複する文化層は、最下層の初源的な石器群を最古に、徐々に多様化し複雑化する石器群の変遷と、体系化していく石器製作の技術過程が看取できる。近年、旧石器時代の捏造発覚後、最下層の出土遺物が改めてクローズアップされることとなり、人類活動の初源を追求する研究者の注目が注がれ始めている。また、出水市も調査を開始し、さらなる成果の充実と周辺遺跡の保護の着手に期待が高まる。

長島町の尻無平遺跡からは、ナイフ形石器文化期の石器群が多数発見されている。注目すべきは、発見される石器が長崎県島原半島の石器と極めて類似することである。中でも台形石器は、その形状及び製作技術は区分し難く、直接あるいは密接な交流のあったことを示している。加えて、川内市成岡遺跡、西ノ平遺跡、知覧町登立遺跡、指宿市小牧3A遺

跡等の出土品にも尻無平遺跡同様の交流を示す石器が数多く認められ、長島を中継地とした東シナ海沿岸線の交流ラインの存在を浮かび上がらせている。

近年、樋脇町と接する入来町浦之名周辺に細石刃文化期から縄文時代早期の遺跡が知られるようになってきている。松山ヶ迫遺跡では細石刃文化期の石器群、鹿村ヶ迫遺跡からは落し穴状遺構が発見されている。

## 2 縄文時代

縄文時代最古の土器群の一つとされる爪形文土器が、上場遺跡第3層で発見されている。この爪形文土器は主に西北九州に分布し、その影響が及んでいたと考えられる。その後、縄文人が上場遺跡や北薩地方を広く生活の舞台とするのは、縄文時代早期の中頃となる。

川内市や樋脇町周辺で、在地の石坂式土器や中九州を分布の中心とする中原式土器と呼ぶ、厚手の円筒形土器群が分布している。さらに、川内市前畑遺跡や大原野遺跡、樋脇町市野原遺跡でも発見が相次ぎ、分布を広げる傾向にある。

次に、上場遺跡群の狸山遺跡や郷田遺跡、出水市中尾II遺跡、宮之城町甫立原遺跡等からは、高山寺式土器や手向山式土器と呼ばれる押型文土器が多数発見されている。この押型文土器は、早期前半に中部地方の山間部で誕生し、その土器文化は列島を南下、九州島の多くの地域もその文化圏に汲み込まれていく。そして、この土器文化は、千年ちかい時間を要して北薩地域に伝わってくる。甫立原遺跡では、鋏形鎌と呼ぶ押型文土器文化独特の石鎌も発見され、これらの地域が彼らの生活の場として適していたことを物語っている。近年、中津川城跡遺跡をはじめ、薩摩町内の各所からこの土器の発見が相次ぎ、その分布を濃くしている。

その後、手向山式土器から派生した平椀式土器、塞ノ神式土器が展開することとなる。上場遺跡群や松山ヶ迫遺跡、薩摩町等で確認されるが、これらの土器群の展開は、本県のほかの地域と共通している。ただ、阿久根市や川内市では、今の所希薄である。

縄文時代前期から後期になると、生産の関心は急速に海へ向けられることとなる。荘貝塚は前期、波留貝塚は前期と後期、江内貝塚は中期から後期、出

水貝塚と麦之浦貝塚は後期と、時期の異なる貝塚が形成されている。また、時期が重なる貝塚からは、その場が回帰の拠点として重要視されたことも示している。貝塚は多くの情報を提供し、当時の生活を復元することができる。またこの時期は、有明海沿岸が同一の文化圏を形成した時代でもあり、柿内遺跡の出土品は、熊本県水俣市や城南町、天草諸島の品々と区分が困難なほど共通している。また、麦之浦貝塚の鐘崎式土器は北九州が発祥とされるが、本場を凌ぐ量が出土している。

沖田岩戸遺跡と大坪遺跡、下柵迫遺跡、川原遺跡は縄文時代晩期の代表的遺跡と言える。前2遺跡は海岸平野を形成する沖積地に、下柵迫遺跡は高尾野川の段丘面に、川原遺跡は川内川中流域の氾濫原に立地し、この時期に生活基盤を丘陵や台地から湿地帯に移した可能性を暗示している。米ノ津川の右岸の水田にある沖田岩戸遺跡と大坪遺跡は、晩期初頭の上加世田式土器から入佐式土器の遺跡で、埋設土器と緑色の玉類の量は群を抜いている。埋設土器の底部は意図的に穿孔することから、土器本来の煮沸機能を終え埋設することで、新たな機能と役割を担う“再生を祈った施設”とも考えられる。玉類については、40点の製品のほか、穿孔や研磨途上のもの、原石や素材剥片もあり遺跡内で玉造が行われたことを示している。今後の研究で、玉造行程が解明される可能性は高い。成岡遺跡の土坑から一括して出土した晩期中葉の完形土器3点は、土器の研究に不可欠となっている。

### 3 弥生時代

甌島列島里村の中町馬場遺跡は、海岸に面した微高地上にあり、縄文時代末から現代までの長期の生活跡が見られる。また、縄文時代から古墳時代では、地点貝塚を形成し動物骨や魚骨を残すことから、生活に関わる貴重な情報を提示している。中でも長期間にわたる弥生時代の遺物は、交流の痕跡を色濃く残し、海上交差の要の地であったことを物語っている。特に、弥生時代成立期から前期は、刻目突帯文土器から板付式土器、さらに亀の甲式土器と途切れることなく残され、有明海沿岸から薩摩半島文化圏の様相を呈している。中期になると熊本を分布の中心とする黒髪式土器で占められ、南九州の土器は見

られなくなる。代わりに北部九州系土器や瀬戸内系土器、奄美系土器も見られ、海上交差の要地とし広域な交流があったことを伝えている。

一方、この時代、川内川の下流域の平野部や沼沢地が新たな生産拠点として成立してくる。もともと、外川江遺跡の後期の大甕や内向花文鏡、麦之浦貝塚の後漢鏡、若宮遺跡採集の石庖丁・石鎌等は知られ、この地域の重要性については指摘されていたが、楠元遺跡、京田遺跡、大島遺跡等の調査成果はその指摘や重要性を具体的に示すこととなった。

中郷町京田遺跡の下層からは、中期後半の水田跡が発見され、黒髪式土器が出土した。この時代の南九州の水田は伝搬以来、自然の沼沢地等を利用した湿田が一般的とされる。発見された水田も湿田で、地形に左右され不定型で小規模の水田跡が確認されている。百次町楠元の百次川が開析した楠元遺跡でも、水田跡が発見されている。遺跡からは弥生時代終末の集落跡と、それに隣接する低地に水田跡が発見されている。集落跡は微高地に、2軒の竪穴住居跡と10基の炉跡や土坑が見つかり、4 m程の方形の住居跡は、壁際に地床炉1基を備えている。なお、10基の炉跡は、住居跡の一部とも考えられる。水田を構成した杭列は、流路が埋没し湿地化する時に打ち込まれている。これらのことから、自然地形を利用した水田と判断し、集落の横に水田が広がる光景が浮かび上がることとなる。

京田遺跡と楠元遺跡からは、木製鋤や木製鍬の農具を中心に豊富な木製品が発見されている。柄は、南九州弥生時代の伝統をそのまま継承した曲柄と膝柄である。鍬には平鍬・三又鍬・横鍬があり、鋤は組み合わせ式で、木製品もあることから遺跡内で農具の生産・加工も行われていたと考えられる。また、京田遺跡では網杵、楠元遺跡では丸木弓・容器も発見され、生産活動の一端を覗かせている。発見された種子のDNA分析の結果、熱帯ジャポニカとコムギが検出され、稲作の起源や生業を解明する手がかりを提供している。

出水地方の弥生時代遺跡は、出水市六月田や高尾野町柴引・下高尾野町一帯に濃密に分布しているが、調査が行われたことはない。

#### 4 古墳時代

弥生時代終末期の楠元遺跡は、自然地形を活かした水田であったが、古墳時代初頭になると本県初の灌漑施設を備えた水田跡が登場することとなる。灌漑施設を備えた水田は、埋没した弥生時代の水田跡に、人工的に掘削した溝（溝状遺構）と、その溝に敷設した木杭で構成される。人工の溝は幅1,3m、深さ0,6mの台形状で、底面にはマンガン分を含む砂礫が堆積し、管理された水路として使われていたことが分かる。溝は東から西に流れ、溝に打ち込まれた63本の杭は、東側と西側で構造が異なり、機能の大きく異なることが理解できる。すなわち、東部分では、十数本の杭が4 m置きに北壁3か所に集中することから、水田への取水口施設と見られる。一方、西部分の杭は、溝の両壁と中央部に対をなして打ち込まれることから、水量調整目的の井堰施設と見られる。この発見は、自然地形利用型の水田から、古墳時代初頭には水利管理型の水田経営に移行したことを証明した。加えて、取水施設が4 m間隔であることから、水田の規格も想定が可能となり、水田経営の変革を追うこともできる。

この時代の大規模集落については、総ての解明が成されていないのが現状である。発掘調査からは、5世紀以降の集落が小河川が開析した沼沢地を足下に、眺望の開く台地上に形成される傾向が見てとれる。隈之城川が解析した沼沢地を見下ろす20mの台地上の成岡遺跡では、中央に炉を持つ16軒の方形竪穴住居跡が、日用雑器、鉄器、鞆の羽口、砥石等と共に発見されている。麦之浦川右岸の13mの台地には6軒の竪穴住居跡が、5世紀後半以降集落を形成していた。

他方、墓制は変化に富んだ展開が認められる。

鳥越1号墳は、本県最古の前期古墳で、南限の初期畿内型古墳である。4,4mの長大な竪穴式石室を持ち、20~25mの前方後円墳が想定される。4,2mの石室床面に割竹形木棺を置き、頭の部分と石室壁面はベンガラで赤く塗彩される。副葬品は、盗掘されたため鉛ガラスの小玉1点が採集されただけで、被葬者やその階層等は謎のままである。また、同一丘陵には5~6世紀とされる8基の地下式板石積石室墓も造られ、主に武器類が副葬されていた。

古墳造営に自然地形を活かしたとする端陵古墳と中陵古墳を、4世紀前半に位置づけるとの考え方もあるが、主体部に石棺が安置されると伝えられることから、築造年代は下ると考えたい。川内川河口の船間島古墳は竪穴式石室構造の円墳、河口5 km上流の御釣場では石蓋土壙墓と箱式石棺墓が残されている。高城川下流域の横岡には、10基の地下式板石積石室墓と2基の土壙墓で構成される横岡地下式板石積石室墓群が知られている。大正12年の調査を皮切りに平成8年の古墳公園整備の間、5回の調査を行い、鉄剣・鉄刀・鉄鏃等の武器類を副葬してあることが明らかにされた。昭和58年には、副葬品としては唯一の蛇行剣も発見されている。

鶴田町、薩摩町古墳群は、川内川中流域の古墳群と表現できる。薩摩町湯田原古墳の内部構造は地下式板石積石室墓を踏襲しているが、マウンド状の自然地形を利用したことにより、主体部は封土内に構築されている。したがって、古墳と地下式板石積石室墓との融合形態との評価もある。副葬品は、鉄剣や鉄鏃等の5世紀代の武器が占める。薩摩町の小松原地下式板石積石室墓群は、地下式板石積石室墓6基と土壙墓1基で構成される。石室は円形構造で、石室が1 m前後であるため、屈葬で被葬したと考えられている。鉄鏃や刀子の5世紀代の武器が、副葬される。薩摩町別府原地下式板石積石室墓群は、9基で構成される。石室は円形構造で、2基の板石の一部に朱を塗彩したのも確認されている。鉄剣と鉄鏃の武器中心の副葬品で、5世紀から6世紀の墓と見られる。

出水市溝下地下式板石積石室墓群の発見は、昭和8年に遡る。詳細な記録は残されていないが、円形と方形の石室構造が共存したと伝えられている。最大規模とされる方形石室から出土した、金環2点・銀環3点・短甲1点・鉄剣1点・鉄刀2点・轡1点・石突1点等は東京国立博物館に保管されている。特に、昭和32年の5基の調査では、鉄刀6点・鉄剣12点・鉄鏃220点と武器中心の副葬が見られた。

高尾野町堂前では30基を越す墓があり、2か所の墓域が存在する。南は古墳時代の墓域で、地下式板石積石室墓9基と土壙墓2基が確認される。板石積石室墓の石室は長方形で、鉄鏃が主な副葬品で5世

紀後半と見られる。北側には弥生時代の墓域が形成され、本県では類例の無い貴重な資料である。弥生時代の墓は変化に富み、板石や扁平礫を用いた埋葬形態が見られる。①土壌を掘らずに、遺骸上を板石で覆い込むタイプ、②土壌を埋葬施設にするタイプで、遺骸上位は板石で覆う。さらに②は(ア)土壌だけのもの、(イ)土壌の片方あるいは両方に石を配置、立てたもの、(ウ)土壌の一角あるいは4面を板石で囲うものにと区分できる。①については、覆石の中央部が落ち込む報告もあることから、棺桶が存在した可能性がある。②については、遺骸を埋めるあるいは納める基本的概念があったと考えられる。次に、①と②の先後関係は埋葬施設の変化や、副葬品の変遷等から①から②への時間的推移が予測できる。その他、下水流の地下式板石積石室墓群、熊本県境の切通箱式石棺墓群もあり、保存対策も併せて説明が急がされる。

脇本古墳群は、新田ヶ丘にある2基の横穴式石室墓・地下式板石積石室墓1基・箱式石棺墓1基と糸割淵丘陵にある2基の箱式石棺墓で構成する。新田ヶ丘の2基の横穴式石室墓は露出し墳丘は残されていない、2号石室墓は石障で3区画されることから、長島の古墳群との関係が指摘され、6世紀後半とされる。板石積石室墓と3基の箱式石棺墓からは、武器類主体の副葬品が出土し、特に、糸割淵1号は鉄剣3点・刀子2点・鉄鏃30点を副葬していた。

東町に淵ノ尻古墳・小向江古墳・加世堂古墳・三船古墳・鬼塚古墳が知られる。一方、長島町には群集して数多くの古墳が残され、指江古墳群・小浜崎古墳群・明神古墳群・明神下岡石棺墓群・温之浦古墳群として知られている。また、既に破壊されてしまったが唐隈や東町の脇崎・火之浦・伊唐島の古墳も過去に存在していた。また、長島の古墳を概観すると、台地の古墳と海岸線の古墳に区分できる。

小浜崎1号墳は扁平礫の小口積み竪穴式石室墓、小浜崎2号墳は複室構造の石室状石棺墓で白金崎古墳、鬼塚古墳、温之浦1・2・3号墳及び加世堂古墳は横穴式石室墓で、これらの古墳は黒ノ瀬戸海峡や長島海峡を眺望する台地の先端部に造られている。海岸線の古墳が、指江古墳群と明神古墳群で、海岸と水田の間の低い蒲鉾状の礫帯に造られる。現在こ

の礫帯は自然堤防の役を果たし、指江で180m、明神で100m程あり、この中に指江で141基、明神で30基以上の古墳が残されている。指江古墳群の石室の平均は長さ200cm、幅75cm、深さ70cmで、栗石を積み上げ3枚程の蓋石で密閉し、その上に栗石を積み上げ墳丘を構築している。調査をした池水寛治は、指江海岸の180mの礫帯全てが141基の古墳の集合体であると推測し、礫帯の全ての栗石が古墳構築のため運び込まれたと考えている。

長島の古墳の立地的特徴は、台地の古墳は巨石を駆使し、眺望の聞く場所に象徴的に造られ、海岸線の古墳は、目立たぬように群集して造られる。古墳の形態でも、積石塚をはじめ“石”を駆使し、薩摩本土では脇本古墳に共通性が認められるだけで独自の展開が見られる。特に、金銅製儀式刀や夥しい玉類を副葬した白金崎古墳は、長島古墳の象徴でもある。不知火海の南端にあり、薩摩とは潮流激しい黒ノ瀬戸海峡で境し、むしろ薩摩とは対峙した観さえる。船団を組み、不知火海を中海に肥後や天草諸島と連携し、富と権力を手中にした有力豪族がこの時期、5世紀後半から6世紀後半に現れたのであろう。

## 5 奈良時代以降

川内川を河口から遡ると、弥生時代以後、その流域に生産拠点が移されたことが素直に理解できる。その後、この流域が新興勢力を生み出したことは、古墳や地下式板石積石室墓と呼ばれる特殊な墓制が流域沿いに展開することで証明されていた。しかし、それらを支えた生活地即ち、集落の解明は大きく後れを取っていた。加えて、7世紀代の様相を示す資料は皆無に等しい現状から“空白の7世紀”とでも形容できる事態である。そこで期待されたのが、川内川の大河川が造りだした肥沃地を取り汲んだ大島遺跡の調査であった。その結果、弥生時代、古墳時代及び8世紀以後の生活痕跡は、予想以上の成果を収めることができた。しかし、7世紀代の資料は皆無に等しく、依然として”空白期間”は充填されていない。空白の時間を残したまま、702年には薩摩国府が置かれ、奈良時代の終わりには薩摩国分寺の建立をもって、薩摩国における政治・文化の拠点として急激に変貌することとなる。都合12回の発掘調

査で、国分寺の伽藍配置や平安時代と鎌倉時代の再建を経た事実が判明し、大和川原寺式伽藍配置であることも明らかにされた。国府跡については3回の調査により、御陵下町入来原が有力な候補地とされ、奈良時代後半から平安時代後期に行政の中核機能が置かれたと考えられている。大量の出土遺物の中には、墨書された戯画土器が発見されている。内側には向かい合う二人の女官のうち片方が乳房を出し、楽しみに笑いあう情景が描かれる。湯浴みの風景であろうか。外側には衣帽子姿の男と白拍子と思われる女性が、羽子板らしき遊びに興じる様が軽妙な筆遣いで描かれている。これらの画面からは微塵の緊張感も感じられず、宮中における上位階層の大らかな時の流れと都の雅やかな香りが伝わってくるかのようである。

大島遺跡の出土品には、8世紀から10世紀前半の遺物が数多く確認されるが、緑釉陶器・越州窯系青磁・製塩土器・硯・石帯具等からは庶民的生活臭は感じられず、むしろ役所的色彩が濃い。移動式竈や本県初の発見となった竈付き住居跡は、極めて特異な存在であり、これらを単に一般的な炊飯装置とは解釈しがたい。また、青磁は交易品であり、緑釉陶器は国内の多産地からもたらされ、風字硯や転用の硯からは行政業務の任の存在を想起させる。このように、国府や国分寺の近くにあり、司業務の一端や特殊な儀式を担った集団の居住区の印象を強く感じとれる。薩摩国府の設置整備の補強策として肥後から大量の入植を行ったと記録されるが、大島遺跡の土師器甕・甔、移動式竈、須恵器等は肥後の影響を強く受けており、確実に人的・文化的つながりがあったことを物語っている。成岡遺跡の11棟の掘立柱建物跡は、平安時代末から鎌倉時代前半とされる。ここでも越州窯系青磁・緑釉陶器・硯等があり、庶民集落的色彩は薄い。隣接する西ノ平遺跡でも、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物が発見されているが、東側に遺構群が大きく広がると予測される。平安時代は前期と後期に2分され、建物配置や出土品から薩摩郡の郡役所跡とされる。緑釉陶器・青銅製帯金具・開眼通寶・硯、特に墨書土器は100点を超し、約半分が「作」とされる。「作」には特別な意味は無く、多数あることから“マーク”即ち印とす

る考えが一般的である。「大舎」は大きな建物、あるいは「舎」は“舎人”に通ずることから役職名とも解される。平安時代の後半には、和泉郡・山門院・莫禰院・高城郡・薩摩郡・入来院・祁答院が成立しており、太宰府を頂点とした新たな地方政治の改編は完了していた。このように、律令体制が現実の姿として記録や遺跡で表されるが、一方、庶民の日常生活を復元できる遺跡は皆無に等しい。

成岡遺跡では、鎌倉時代、室町・安土桃山時代、江戸時代と引き継がれ、西ノ平遺跡は、鎌倉時代の薩摩郡郡司の居住地候補とされる。川内市百次町の上野城は、縄張りや空堀が残されている。発掘された5軒の竪穴建物跡は、壁に添う柱跡と中央部に炭を残す特徴がある。近年この建物の発見が相次ぎ、工房や保存穴蔵との見解が示された。竪穴建物の出現は、鎌倉幕府の体制強化の時期と重なり、年貢徴収確保目的の流通路の整備とも軌を一にすることから、今後注目したい考古資料である。

この時代は、島津氏や渋谷氏等下向した鎌倉武士と在地領主との長く激しい争いが繰り返された争乱の時代でもある。各地に山城を築き、戦いや離合集散を経、1570年の島津氏の三州統一をもって新たな時代が到来する。

北薩はその地理的特性から全ての時代を通し、南九州における情報やモノの間口であり交差点でもあった。大和政権樹立後から、その安定化のためにこの地が最前線基地としての役を負わされ、翻弄された時代もあった。このように北薩は数々の歴史を刻み、また、先人達はその時代・歴史を継いできた。これからも語り継ぐべき歴史、残すべき文化財が多い“北薩”である。(長野眞一)